

このたび、内視鏡室が本年5月より新築された西棟1階に移転し、新しく内視鏡センターとして生まれ変わることになりました。これまでの内視鏡室は、個人的には長年にわたりたくさん検査を行い、慣れ親しんできた場所でもありますが、感謝をしつつ新しい内視鏡センターに移転することになりました。

旧内視鏡室は、検査室そのものや前処置を行う場所も雑然としていて狭い空間でした。患者さんの中には満足していただけなかった方もいらっしゃると思います。新しい内視鏡センターでは、新しく綺麗なのもちろんですが、検査室を広くし、数も増やしました。待合室、前処置を行う場所も落ち着いた快適な空間となっております。思わず完成して最初に見た時には、ふだんなかなか笑顔がでない私ですが、自然と笑顔になってしまいました。検査を受ける場合、患者さんの緊張や不安感は計り知れないものだと思いますが、それを少しでも払拭すべく、環境を整えました。

新・内視鏡センターについて

内視鏡センターセンター長

中庭 礼智



市立病院だより

# ほほえみ

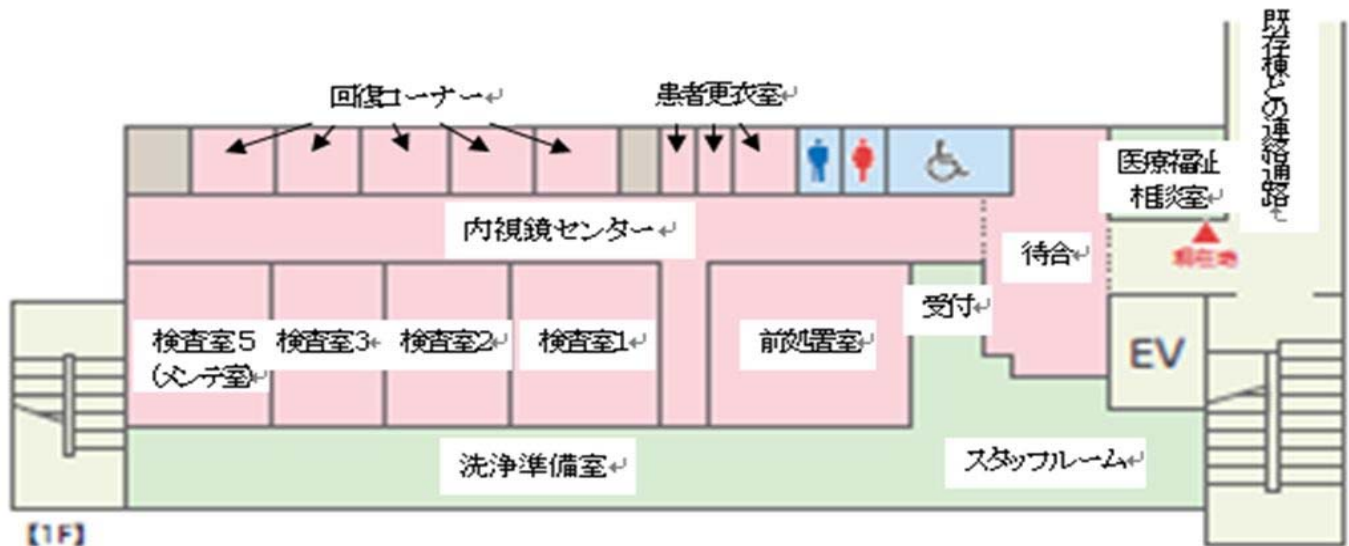


発行	越谷市立病院
発行人	院長 津村 秀憲
編集	院内情報誌編集委員会
連絡先	〒343-8577 越谷市東越谷10-47-1
電話	048-965-2221 (代)
FAX	048-965-3019
発行日	平成24年5月 (No.12)

消化器系の癌は依然として、死因の上位を占めているのが現状です。食生活などを改善し、病気を予防する予防医学も大事ですが、病気を早期に発見し、早期に治療を行うことも重要です。内視鏡の進歩により、狭帯域内視鏡システム(NBI)なども開発され、かなり小さな癌も見つけることが可能となりました。早期に発見されれば、内視鏡的切除による低侵襲治療が可能となります。そのためにはまず検査を受けていただくのがスタートです。検査を受けるときの体調や状態、緊張感などで検査が苦痛に感じられたり、病気の種類によっては、わざと胃に空気を送りこまないで発見できないような病気もあるため、そのときに苦痛を感じてしまうこともあると思います。それを少しでも軽減できるようにスタッフ一同サポートさせていただきます。それでは、内視鏡センターでお会いしましょう。

最後に、この内視鏡センターの開設にあたり、病院関係者の方々やスタッフが日々遅くまで準備を重ねてきてくれたことに感謝しながら、今後活動していきたいと思っております。

《内視鏡センターレイアウト図》



# アレルギーについて

皮膚科医長

上郎 一弘

## 〈蕁麻疹とは〉

今回はよくみられるアレルギー皮膚疾患のひとつである蕁麻疹についてのお話です。

特徴的な症状は、赤く盛り上がったブツブツ（膨疹 ぼうしん）で、痒みが強いのの特徴です。まれにチクチクと痛い感じがすることがあります。これらの症状は、数十分から数時間で消えることもありすが、次々と症状が現れたり消えたりしながら一日中、続くこともあります。皮膚の毛細血管が膨らむので赤くみえ、血液のなかの血漿成分がしみでてくるので皮膚が盛り上がってきます。

## 〈蕁麻疹の原因〉

蕁麻疹は、食べ物や運動、疲労など様々な刺激が原因となり、体質や体の状態と組み合わせることで症状が起こるとも考えられています。また蕁麻疹の多くは、皮膚の肥満細胞から出てくるヒスタミンという物質が関係しています。アレルギーをはじめ、なんらかの原因によって皮膚の肥満細胞から放出されたヒスタミンは血管や神経に作用して、かゆみや皮膚が盛り上がる膨疹などの症状を引き起こします。

## 〈蕁麻疹あれこれ〉

症状が始めてから一ヶ月以内に治るものが急性蕁麻疹です。急性蕁麻疹では、細菌やウイルス感染など、原因がはっきり分かっていることもあります。

その一方で、症状が一ヶ月以上続くものを慢性蕁麻疹といいます。慢性蕁麻疹では原因が分からないことがほとんどです。

また皮膚そのものに刺激が加わるときに起こるのが物理性蕁麻疹です。

お風呂に入ったたり、緊張したりして汗をかくと症状が現れるのはコリン性蕁麻疹と呼ばれるタイプのものです。

## 〈蕁麻疹の治療〉

特定の食べ物など蕁麻疹が起こる原因が分かっているだけで済ませることはできません。日々の生活では疲労やストレスをためないことも大切です。

また先に述べたヒスタミンの働きをおさえることも治療のポイントです。よく使われるのが抗ヒスタミン薬や抗ヒスタミン作用のある抗アレルギー薬です。

蕁麻疹が続くと皮膚以外の内蔵の病気を疑ったり、不安になったりしがちですが、ほとんどの場合、肝臓などの病気とは関連がありませんのでひとまずは御安心の程を。



# 蕁麻疹の薬物療法

薬剤科 副科長

田中 真知子

薬物療法は抗ヒスタミン作用のある抗アレルギー薬を使うのが基本です。重症例や蕁麻疹様紅斑に類似したものはステロイドの内服も併用します。

◎急性蕁麻疹（明らかに誘因なく膨疹の出没を繰り返す、発症後一ヶ月以内のもの）

①抗アレルギー薬の内服

アレグラ・アレロックOD・タリオンOD・アレジオン・クラリチンレディタブ・

ジルテック・エバステルODなど

②診察時に強い痒みや露出部に広範囲に皮疹が出現している場合に追加

強力ネオミノフアーゲンシー注+ポララミン注を緩徐に静注

③個々の皮疹が半日以上持続し、かつ体表の半分以上に及ぶ場合に追加

リンデロン注を②に追加又はプレドニン錠内服

◎慢性蕁麻疹（明らかな誘因なく膨疹の出没を繰り返す、発症後一ヶ月以上経過したもの）

急性蕁麻疹に準ずる。

・眠気、倦怠感がある場合

**アレグラ・クラリチンレディタブ優先**

プレドニンについては漫然と使用しないよう注意

抗ヒスタミン薬は眠気や作業能率の低下を生じることがあるので、自動車の運転等危険を伴う機械の操作に注意が必要です。

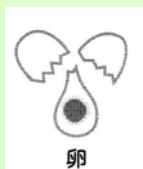
## 『じんましんと食べ物』

栄養科 田村 規江

「じんましん」の原因として一番多いのは食べ物です。体調などにも左右されますが一般的には左記のような食材がじんましんの原因になるといわれています。

卵、乳製品（鶏卵・牛乳・チーズなど）  
魚介類（鯖・マグロ・エビ・カニ・貝類）  
肉類（豚肉・牛肉・鶏肉など）  
穀類（大豆・小麦粉・ソバなど）  
野菜類（ジャガイモ・トマト・筍など）  
果実（メロン・リンゴ・桃・バナナなど）

それから防腐剤や香料といった食品添加物などにも「じんましん」を引き起こす物質が含まれています。こうして見てみると結構沢山ありますね・・・  
疲れている時や、調子が悪い時などは食べるものを吟味して食べると良いかも？



## 『膝スポーツ診』

整形外科医長

永山 正隆

平成二十四年一月から膝スポーツ診を私と羽生医師で行っています。

◎膝前十字靭帯損傷…活動性の低い方は保存的治療で問題ないことが多いのですが、スポーツ愛好家などの活動性の高い方には競技復帰のために、前十字靭帯再建術をお勧めしています。受傷後の急性期に再建術を行うと、術後に膝の可動域制限が出ることが多いので受傷後一ヶ月程度あけて、腫れが完全に引いて可動域が回復した時点で再建術を行います。入院期間は約一週間で、スポーツ復帰は術後六〜八ヶ月程度です。

◎膝半月板損傷…膝を捻ったりして強い外力が加わると半月板という線維軟骨が切れてしまうことがあります。関節鏡を用いる鏡視下手術により小さな傷で手術を行うことができます。傷が小さいために術後の回復も早く低侵襲な手術であると考えられています。半月板損傷直後から筋力が低下してきますので、術後にこの筋力低下をリハビリによって正常の状態に戻し、安定性、持久性などを高めるトレーニングを十分行ってから約二〜三ヶ月でスポーツ復帰することが目安です。



## 新採用医師の紹介

○3月1日付

(皮膚科)  
上郎 一弘

(呼吸器科)  
高 遼

○4月1日付

(神経内科)  
中村 真一郎

(呼吸器科)  
鈴木 佑

(消化器科)  
池田 奈帆

(小児科)  
吉田 恵美子

(産科)  
竹元 葉

(呼吸器科)  
森永 真紀

(消化器科)  
高橋 秀平

(婦人科)  
河村 彩

(呼吸器科)  
市川 亮介

(産科)  
小泉 朱里



## 編集後記

「ほほえみ」第十二号をご覧いただき、ありがとうございました。

私は四月より院内情報誌編集委員長を石井 義之先生より引き継がせていただきました。どうぞ宜しくお願い申し上げます。

私も新しい西棟を内覧いたしました。新しい校舎の匂いがして学生の頃を思い出しました。新しいスタッフも加わり新生越谷市立病院をどうぞ宜しくお願いします。

院内情報誌編集委員長

尾羽澤 英子